

生徒の「声」を聴くこと
— 思春期リアルと養護教諭の相互作用 —

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
山村 和恵

キーワード 生徒の声、保健室、養護教諭

保健室にはいつも多くの生徒たちが来る。そして、様々な悩みが吐露される。本論文は、何が保健室で起こっているかを描き出す事を目的としている。冒頭で筆者は、本論文の問題提起と目的に至るまでの経緯を明らかにしている。生徒が危機的状況であると訴えてきた時の様子をエピソード記述として描き出し、各章の考察で、養護教諭と生徒の関わりの中で何が生まれているかを記述している。第1章「大人との摩擦」恋人同士のふたりが、周囲の大人と衝突し、自傷行為を繰り返す。第2章「危うい自己決定」3人の生徒がレイプ被害、SNS動画拡散、多数の性被害を受ける。第3章「埋もれやすい声」DV被害を受けた生徒たちから、過去の性被害や現在の悩みの告白をうける。第4章「本当の自分との格闘」過去に発達障害と診断された生徒が歩行障害になる。第5章「養護教諭と生徒の折り合い」家出を決意した生徒が、養護教諭とのやり取りから、自分にとって何が一番良い決断なのかと決定する。これらの5章、8つのエピソードからは、保健室を通して現在の生徒たちの「思春期のリアル」が映し出された。養護教諭は翻弄されながらも、本人の心情をうけつつ整理し、別の選択肢を少しずつ提示して、生徒が試行錯誤する事に伴走しつづけることがわかる。